

木と私、「対等」という事

五年 佐藤 和

私は、今回の体験を通して、森林と人は対  
 等なのだとして理解することが出来た。以前まで  
 森林とは、人の手を借りなければ環境が保た  
 れないものだと思っていた。最近特に、森  
 林の保護などのニュースをよく聞く。その表  
 面だけを見て、勝手に自然よりも人の方が上  
 だと考えていた。

気持ちが変わるきっかけとなったのは、森

林学習の時の事だ。森林にある一本一本の木  
 は、他の生き物のすみかになり、地球温暖化  
 を防止する一環として二酸化炭素を取り込み、  
 酸素を生み出していた。そして、根を張り、  
 山全体を支え、私達が使う水を蓄えてくれて  
 いた。私は、この事に衝撃を受けた。木なん  
 て、一生生まれた場所について、さぞかしつま  
 らない人生を送っているだろう、と可哀想に  
 思っていたのだ。だが、実際は生まれた場所  
 で、一生をかけて誰かのために生きていたの

第27回森林は友達作文コンクール



だ。啞然としたまま受けた丸太切り体験は私  
 の気持ちを増強させるものだった。スギの  
 木を手にとった瞬間、「木」という存在にま  
 た驚かさした。想像以上に重か、たからだ。  
 いくら木でもここまで重くはないと思っ  
 た数分前とは打って変わって、堂々とした立  
 派な木に驚嘆した。

驚いたのはその事だけではない。森林に足  
 を踏み入れてみても驚く事が沢山あった。ま  
 ず、葉っぱには匂いがある事だ。当たり前と

言えばそうだが、これも違う匂いでそれ  
 に特徴があった。柑橘類のようなスツキリと  
 した爽やかな匂いがあるれば、とても、言葉に  
 できない、ともかく凄く強烈な匂いもあった。  
 私は、天敵が寄り付かないようにしている  
 と思った。脳みそが無いのに凄いと感心した。  
 そして、この葉にも人のようにオリジナル性  
 がある事だ。笛のような音をだせる葉もある  
 ば、こする事でお金を綺麗にピカピカにした  
 葉もあった。人と同じように、この種類にも

第27回 森は友達! 作文コンクール



西東京市立 向台小学校 五年 佐藤 和

それぞれ特有の性質があり、面白いと思っ  
た。私は、森林の面白さ、偉大さ、重要さを通  
して、人と森林が対等だと思う。私は、誰か  
の家になる事も、自力で二酸化炭素と酸素を  
入れ替える事も、山を崩さないように水を溜  
める事も出来ない。しかし、だからと言って  
木が堂々と道を歩くのも難しいだろう。だか  
ら「対等」なのだ。どちらかが上でも下でも  
ない、同じ立場なのだ。それ故に、片方が片  
方を傷つける事はあってはならないと思う。

地球温暖化もそうだ。実際、人が森林をはい  
めとした自然界を、以前の私のような考えで  
踏みにじっている。それなのに自然界が被害  
を受けている。それでも自然界は今まで通り  
に人間を支えてくれている。私達人間は、も  
と自然と共存していく姿勢をもった方が良  
いと思う。無論、もっていないと言っている  
わけではない。自然を今以上に守るべきだと  
言う事だ。木と私、「対等」という事を忘れ  
ず、これからは自然を守っていききたい。

第27回森林は友達作文コンクール